

『日本から死刑を廃止するために』

今村法律研究室フォーラム 日、韓、EUの識者が講演



向けてメールを送った。駐日EU代表部2等書記官のダビッド・ミリヨ氏は、EUはあらゆる国での死刑制度の廃止を目的として活動していると言った。

また、81年に死刑制度廃止を大統領選の公約に掲げたミッテラン元仏大統領が「良心に基づいて廃止を実現する」と主張、極刑維持の世論を押し切った廃止を断行した姿を紹介。さらに、「日本のトップが死刑制度廃止についてリーダーシップを発揮していないのが残念。死刑は人権問題」と語り「死刑制度についてもっと議論を深めるべきだ」と訴えた。

進められ、まず菊田幸一明治大学名誉教授(弁護士)が「死刑制度を問い直し、執行停止を」と呼びかけた。小川原優之氏(弁護士、日弁連死刑廃止検討委員会事務局長)は「米国に見る終身刑の現状」について講演した。続いて「死刑執行を停止した韓国の現状」と題し韓国・東国大学の朴秉植教授が講演。同教授は日韓両国の死刑廃止運動の懸け橋となっている。同教授は、1983年から約10年間、日本に留学し菊田幸一氏のもとで犯罪学の研究を行ったことを報告。「日本で死刑廃止問題を学び、韓国に持ち込んだ」と語った。同教授によると、48年から軍事政権が続いた韓国では、政治犯らが処刑

韓国の現状を語る
朴氏と、左から菊田氏、小川原氏

され、87年の民主化以降も死刑執行は減らなかつた。「年平均で18人が執行されるような国だった」。それが97年に23人が執行されたあと、98年に誕生した金大中政権以降、現在まで執行ゼロが続く。それを前提とした法改正も進み、死刑囚は刑務作業を行えるようになり、「死刑確定囚」という処遇となった。

死刑ゼロから16年。国際人権団体は、韓国を事実上の廃止国として分類している。朴教授は「私の理論は日本製。大切なことを教えてくれた日本のことを心配しています」と日本の死刑執行停止に

「日本における人種差別を考えるシンポジウム」



「日本における人種差別を考えるシンポジウム」

ヘイトスピーチ(憎悪表現)の問題点と法的な規制の是非を考える「日本における人種差別を考えるシンポジウム」(主催:自由人権協会)以下JCLU、共催:社会科学研究所、文学部人文・ジャーナリズム学科)が10月19日、神田キャンパス

議論をたかかわせた、右から西土氏と師岡氏

現の自由」は適用されるのか否かが議論のテーマ。基調講演には、1月まで国連の人種差別撤廃

委員を委員を務めた英キール大学名誉教授(国際法)のパトリック・ソーパー氏が登壇。日本を含む世界170カ国以上が締結している人種差別撤廃条約の目的や、同委員会と日本政府との見解の相違を説明し「日本には人種差別を禁止する包括的な法制度がない」「表現の自由は無制限なものではない」と語った。パネル討論では、特に在日コリアンに対するヘイトスピーチに対し法律による規制を求める師岡康子弁護士と、規制に否定的な西土彰一郎成城大学法学部教授(憲法)が、被害の実態と現行法との兼ね合いについて考えを述べた。

師岡氏は「ヘイトスピーチは人種差別の一つ。暴力的な誹謗・中傷はマインリティーの絶望や恐怖、行動抑制を生むだけ

スポーツ研究所プロジェクト

文科省委託事業に採択

専修大学スポーツ研究所(所長 佐藤雅幸教授)のプロジェクト「女性スポーツにおけるフランス・レシヨナルリサーチの実践プログラム」が、文部科学省の女性アスリートの育成・支援プロジェクト委託事業として採択された。

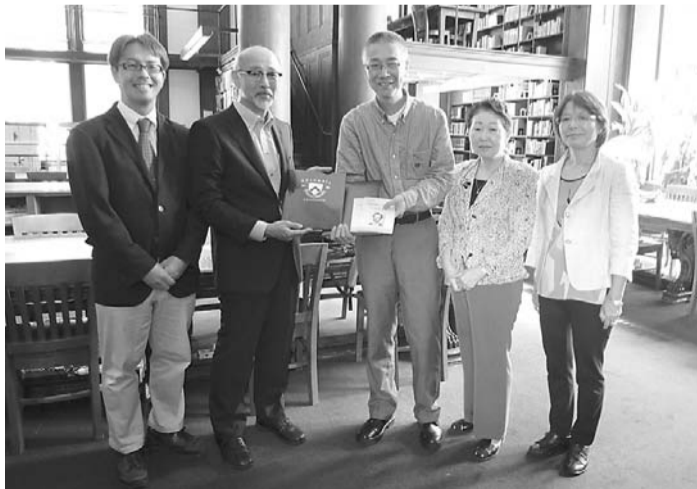
事業実施責任者は相澤勝治文学部准教授、副責任者は久木留毅同教授。委託期間は本年8月1日から2年間(予定)。専修大学のほか、女性スポーツの研究者や企業との共同プロジェクトで、専修大学をプラットフォームとして今後、日本の女性スポーツ環境を整えるための知見や活動の蓄積されたスポーツ医・科学的知見やサポータープログラムを、パラリンピックにも生かしていく予定である。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催にあたり、本事業を通して、組織間、競技間、世代間を超えて女性アスリートにスポーツ医・科学情報や教育プログラムを共有・活用するための組織(仕組み)の構築を目指している。

現場へ生かすためのフランス・レシヨナルリサーチ(橋渡し研究)に着目し、効果・検証を行う。さらに、これまでにオリンピック

の研究者や企業との共同プロジェクトで、専修大学をプラットフォームとして今後、日本の女性スポーツ環境を整えるための知見や活動の蓄積されたスポーツ医・科学的知見やサポータープログラムを、パラリンピックにも生かしていく予定である。

相馬永胤科研グループ→コロンビア大学 相馬永胤の英文日記を寄贈



コロンビア大学のチエン館長に相馬日記CD版を寄贈。左から永江教授、大谷教授、チエン館長、日本研究司書の野口幸生氏、黒沢教授

相馬永胤先生は、1975年から2年間、ニューヨークのコロンビア大学に留学し、法律を学んだ。2年間のマンハッタン滞在を、米国製の手帳に英語で記録している。

1987年1月1日
(土)「A beautiful morning. Thermo. 45」
(快晴、華氏45度)から始まる日記には、日々の行動が几帳面に記されている。授業や模擬裁判のこと、ときには新講座「政治学」の講義スタイルが好きではない、など当時の相馬の様子を伝え、興味深い。

同大学ロースクールに現地調査を行った。その活動の一環として英文日記をコロンビア大学に寄贈して役立ててもらおうと。同大学は日本研究が盛んで、関連コレクションも全米で最大級。寄贈先はその拠点C・V・スター東アジア図書館。

8月25日、大谷、永江、黒沢の3人は、日高義博理事長からの書状とともに相馬英文日記CD版2部を図書館長のジム・チェン氏に手渡した。1部はロースクールに保管される。

同図書館を飾るステンドグラスは、天秤と剣を持った正義の女神が描かれ、チェン館長によると、ロースクールの図書館だったとのことである。

相馬先生留学中のコロンビア大学は、現住所より南の地区にあり、相馬先生が学んだ場所と地理的には異なるが、相馬日記が旧ロースクール図書館に保存されることには縁を感じさせる。コロンビア大学で相馬日記が活用されることを期待したい。(黒沢眞里子)

専修大学創立者の一人である相馬永胤先生は、1975年から2年間、ニューヨークのコロンビア大学に留学し、法律を学んだ。2年間のマンハッタン滞在を、米国製の手帳に英語で記録している。

当時の学生が書き写した日記記録なども保管されており、相馬日記も初めに相馬永胤科研グループの大谷正(文学部)、黒沢眞里子(文学部)、瀨戸口龍一(大学史資料課)、永江雅和(経済学部)に保存されていることには縁を感じさせる。コロンビア大学で相馬日記が活用されることを期待したい。(黒沢眞里子)